

ぽっちゃりナースですが エリート外科医と身籠もり婚します

ひなの琴莉
Kotori Hinano



目次

ぽつちやリナースですが
エリート外科医と身籠もり婚します

書き下ろし番外編

愛する家族と愛しい日々

ぱつちやりナースですが
エリート外科医と身籠もり婚します

プロローグ

「こんなぱつちやり体型の女性を好きになる人なんているんでしょうか？」

「ああ、いるよ」

確信を持った様子で頷かれて、小さな希望の光が差したような気持ちになる。
しかし今日の私は、かなりマイナス思考だ。

「いるわけないです」

「俺は可愛いと思うが」

熱い眼差しで見つめられ、溶けてしまいそう。体が火照りだし、水を一気飲みする。

「もう、冗談はやめてくださいよ。心臓に悪いじゃないですか。思い出してしまってます」

このまま話を続けると彼のペースに乗せられそうで、話題を途中で変えた。
なのに！

「じゃあ、忘れさせてやろうか？」

破壊力のあるワードに、心臓がドクンと高鳴る。

「漫画みたいなセリフですね」

「そうか？ 目の前に好みの女性がいたら逃したくないと思うのが、男の心理だ」

まるで私を狙っているかのような口ぶり。
珍しい展開に勘違이しそうになるけれど、私を恋愛や性的な対象として見る人には出

会ったことがない。

「話を聞いてくれたので、元気になつてきました」

「それはよかったです」

「ちよつぴりドキドキする経験もできましたし。……もう恋しないで、お仕事一筋で頑張つていきたいです」

「なにを言っているんだ。こんなにいい女を放つておくなんて、風子さん^{ふうこ}の近くにいる男は見る目がないだけだ。恋をしないなんて宣言するな。俺と恋愛すればいい」

さり気なく胸に響く言葉を言ってくれる。今日のこの出来事だけで、これから先、ずっと幸せに暮らしていくそうだ。

「優しいんですね。ありがとうございます」

「ありません」

「キスやセックスは？」

「セツ……！」

フレーズだけで恥ずかしくて、頬が火照ほてってしまう。

「あるわけないじやないですかつ」

「それはもつたいない」

たしかに、愛する人の行為はものすごくいいと聞いたことがある。

友達もそう話していたし、漫画や恋愛小説もそうだ。

女としての悦びよびを知らないまま生きていくのは、損しているのかもしれない。

「相手がいないとできません。なんなら、お兄さんが私の初めてを奪ぬけつてくれますか？」

少し重くなってきた空気を変えたくて、私のキヤラではないけど、わざと冗談めかして尋ねた。

「ああ、喜んで。たっぷりと、可愛がってやる」

けれど大真面目な顔でそう答えられたので、心臓を矢で射貫かれたみたいな衝撃が走る。

私とそういう関係になれると言つてくれるのは、稀まれな人かもしれない。

今後、誰とも付き合うチャンスはないだろうし……一生に一度くらい経験してみたい

けど……

酔つ払つているせいか、イケないことを考えてしまう。

「本気ですか？」

「俺は嘘うそをつかない」

(初めて会った人と……いいのかな……。悩むけど……委ゆだねてみたいかも……やつぱり、ダメだよね。危ないよ。ダメダメ……でも……)

「いただきまーす」

第一章 まさかの、ワンナイトラブ！

職員が使える食堂で、少し大きめの手作り弁当の蓋を開けた。甘い卵焼きから頬張る。

(んまあつい！ 美味しすぎる～～)

ここでは、食券を買ってランチセットを注文してもいいし、お弁当を持参することもできる。私はいっぱい食べたいので持ち込むことが多かった。

「美味しいぞうに食べるわね。ここ、いい？」

「はい、どうぞ」

トレーに餡かけチャーハンを載せた先輩ナースが話しかけてきたので、笑顔で頷いた。

「そちらも美味しそうですね」

「ふーこちやんつたら、食いしん坊ね。うふふ」

私の名前は河原風子。新卒で働き始めて四年目の、総合病院のナースである。

配属先は、心臓外科と循環器内科が合体している病棟だ。

心臓の病気に強い医者が多いが、内科や整形外科などの優秀な人材も多数在籍している。

元々は診療所から始まつたこの病院は、今では最新の医療機器を揃え、様々な患者さんを受け入れる体制が整つていて、院内も病室もホテルのような雰囲気だ。

評判もよく、芸能人や大物政治家が入院してくることもしばしば。

ところが最近では、人員不足と経営不振で少々伸び悩んでいるらしい。優秀な医者が立て続けに引き抜きにあつたのだ。

「小児科、寿退社が多くて人手不足みたいよ」

「そうなんですか」

「これ以上、人手が減つたら病棟も大変よね」

「深刻な問題ですね……」

「でも今度、優秀なお医者様が来るって噂だから、少し安心してるけど。病院の評価が

上がれば、働きたいってお医者さんもまた増えるわよねえ。はあ、でも、私はいつ寿退社できるのかしら」

先輩が、大きなため息をついて苦笑いした。

それは私も意識してしまうところ。学生時代や看護学校時代の友達にも、結婚する人が増えてきた。

私もいつかは好きな人と結婚して可愛い子供が欲しい。そんな夢を抱く年頃なのだと。とはいっても、相手がいなければその夢が叶うことはない。

ただ、好きな人はいる。相手は、同じ病院で働く本田先生。

私たちとは同じ時期に配属され、その時から仲がいい。新人の頃からお互いの苦労話をして励まし合っていた。そのうちに仕事帰りに一緒に食事をする間柄になつた。おしゃれなレストランとかではなく、居酒屋ばかりだつたけど。

話も楽しいし、私がいっぱい食べてもらって見ていてくれるのだ。

たまに『食べすぎなんじやないの?』と言われたこともあつたが、きっと体を心配してくれているんだと、前向きに受け止めている。

彼はナースからも女性スタッフからも人気があつて自分には手が届かない人だし、このままの関係が続けばいい……

(あ、でも本田先生が結婚しちゃったら、一緒にご飯行けなくなるかな)

「聞いてみたかったんだけど、ふーこちゃんは、本田ドクターとお付き合いしてるので？」

唐突に質問され、ボロッとコロッケを落としてしまう。

「ないです！……絶対に！」

「あら？ あらあらあ？」

「じゃあ、片想いね」

気持ちを見透かされているみたいで、頬が熱くなるのを感じた。

（目が合った。）

これ以上隠しきれない。コクリと頷いて視線を上げると、まさにその——本田先生と目が合った。

（聞かれた！ どうしよう）

けれど、本田先生は聞こえないふりをしているのか、本当に聞こえなかつたのか、窓際のカウンター席に座つた。……顔面蒼白に見えたのは、気のせいだろうか。

男性に女性として扱われたことがない私は、交際経験がない。

何度も片想いをしたことはあつたが、告白しても玉碎するのが目に見えていて、チャ

レンジしたこととなかつた。

「告白してみたら？ 若いうちに恋愛しなきや干からびちやうわよ」

「……いやあ、なかなか」

ちらりと視線を動かして、本田先生の背中を見る。聞こえていたらかなり気まずいと思いつつ、残りのおかずを口に運んだ。

今日は緊急の患者さんが入院してきて大変な一日だつた。

着替えを終えて更衣室を出ると、少し離れたところに本田先生が立つていた。

いつもだつたら、このタイミングで出くわしたら、一緒に食事をして帰ろうという流れになる。

けど、昼に先輩とのやり取りを聞かれたかもしれない。そう思うと、二人の間に重苦しい空気が流れているように感じた。

「本田先生、お疲れ様」

いつものように明るく話しかけたが、彼は嫌そうな表情を浮かべた。周りに人がいることを確認して、近づいてくる。

「はつきりさせておきたいんだけどさ……。今日の昼、話が聞こえてきちゃって」やはり私が本田先生のことを好きだと言っていたのが、聞こえていたみたいだ。恥ずかしくて頬が熱くなる。

「ああ……うん……」

「わ、わかってるよ……そんなこと動搖を隠しながら答える。

「ぱっちやりした子はタイプじゃないんだ。ただの友達としてしか見てなかつたから、俺のこと、そういう目で見ないでくれない？」

大きく激しい打撃が襲いかかるのではなく、少しずつ冷たいものを体の中に流し込まれるような。そんなふうに、悲しみが広がっていく。
「太つてる人って自己管理ができていないと思うんだ。しかも、なんかちょっと汚い感じがするし。いや、ぶーこが汚いって言つてるわけじゃないんだけど……。性格は明るくて可愛いけど、知り合いとかに紹介するのはちょっとなあ。医者やつてるのにそんな彼女連れてるのか、とか言われたら嫌だし」

こんなひどいことを言う人を好きだつた自分が恥ずかしくなつてくる。
だけど言い返すことはせず、私は満面の笑みを浮かべた。

「ああ、やっぱり聞こえてたんだね。そんな真面目な意味で言つたんじやないよ。お医者さんとして素晴らしいから尊敬していて、それで好きだつてことだから、き、気にしないで。じゃあ、お先」

そう言つて、その場を立ち去る。これ以上冷静でいられそうになかつた。急ぎ足で職員通用口から出していく。

幼い頃から太りやすい体质だった。

シングルマザーとして育ててくれていつも仕事で忙しかつた母に代わり、祖父母が美味しい料理をいっぱい作つて食べさせてくれた。

母は私に寂しい思いをさせているからとおやつを買い与え、私の体にはだんだんと脂肪がついてしまつた。

中学生の頃は体型を気にするようになつて、食事を減らしたり、運動を頑張つたりしたけれど、なかなか痩せられなかつた。

男子に『ぶーこ』とからかわれても、ブヒブヒと豚の真似をしてみんなのことを笑わせていた。

『ぶーこの意味わかる?』

『えー、なになに?』

『ぱっちやりで、おバスつて意味も込めているの』

中学生のとき、友人が陰でそう話していふのを聞いてしまつてから、自分を卑下する癖がついた。ただ、暗い性格では嫌われてしまつと思つて、いつも笑顔で過ごすように心がけ、物事をいいふうに捉えるようにしていたから、友達だけはたくさんいる。

大人になつた現在は百五十三センチ六十三キロ。今が人生で一番痩せているけれど、平均体重にはほど遠い。

この体型ではなにを着ても似合わない気がして、いつも地味なワンピースばかり。まぶたは二重だけれど鼻と口は小さめで、かなり童顔だ。なるべく大人っぽく見えるよう、前髪を横に流している。

入社後の飲み会であだ名の話題になり、深く考えずに話したところ、おじいちゃん先生や一部の男性ドクターがからかって『ぶーこちゃん』と呼ぶようになってしまった。そんなふうに、小さい頃からいろんなこと言われてきたので、あまり気にしないようにしていたけど、今回ばかりはさすがにキツイ。

（嫌なことがあったときは、甘いものを食べて甘いお酒を呑んで忘れるしかない！）ダメな方法だが、これが私のストレス解消法。

まっすぐ家に帰る気になれず、駅の近くにある高層ホテルのバーに入つてみた。早速甘いお酒を頼んで何杯か呑んでいると、思い出すだけで悔しくて泣けてくる。

四年間、温めてきた恋心が一瞬にして玉砕してしまった。

その傷を癒すために、一人で涙を零しながらひたすら呑む。

「……あんな言い方しなくてもいいのに」

思わず小さな声でつぶやいた。

「どうぞ、ピンク・クレオールです」

すかさず目の前に置かれたカクテルをまた口に含んだ。

（あれ、これで何杯目だっけ？）

頭がぼんやりしてきて、体がふわふわしている。

アルコールには強くないので、このまま呑んでいたら記憶をなくしてしまいそうだ。無事に帰宅できるか心配になつてくるが、今は辛い気持ちを流し込んでしまいたい。

「大丈夫か？」

突然そう声をかけられて視線を動かすと、今をときめく俳優のような男前が立つていた。

心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

清潔感のある黒髪。意志が強そうで、物事を冷静に判断しそうな瞳。綺麗な二重。筋の通つた鼻と形のいい唇。身長が高くて、スリットの上からでも筋肉質なのがわかる。こんなに完璧な容姿をした人を見たことがなく、振り返った姿勢のままフリーズした。「呑みすぎはよくないぞ。急性アルコール中毒……つて、えつ？ 嘘だろ？」

男性が驚いたような声を出した。

「いや。きみは、なんで悲しそうにしてるんだ？」

「……失恋、です」

「へえ」

男性はなぜか隣の席に腰かけると、カウンターに肘をついて手に顎を乗せ、視線を向けてくる。

「慰めてやろうか？」

「大丈夫です。間に合っています。からかわないでください」

「一人で呑んでいても、マイナス思考にしかならないぞ」

それは……たしかにその通りかもしれない。泣いても気持ちは鎮まらないし、過去に言われた辛い言葉ばかり思い出す。

(埒^らが明かないかも。それなら、甘えてみようかな……)

相当酔っ払っているのもあって、見ず知らずの人だつたが、話してもいいかなと思い始めた。

私は頷いてグラスを持った。彼がチンとぶつけてくる。

「で、どんな男に振られた?」

始めていた。

「医者が好きなのか?」

「いえ、そういうわけじゃない。実は、看護師やつてまして」

「ほう」

「お医者様です」

「好きになつた人が医者でした」

「ふうーん」

勤務先などの詳細は隠しながらも、体型が原因で振られたことを伝えた。

彼は聞き上手なのか、普段はこんな感じやないのに、ついつい口が動く。

「私は小さい頃からぽつちやり体型で、女の子として扱われたことがないんです。その上、あだ名はぶーちゃん。名前が風子で……ぶーこになつたんです。……私だって女の子扱いされてみたい。きっとこれから的人生、なにもない今まで終わってしまうんです」

涙をボロボロ流しながら、カクテルを一口呑んでは弱音を吐く。

彼はそんな私の話を黙つて聞いていた。

「体型については体质もあるから、努力しても痩せにくい人もいる。それに好みがあるから、その男の好みに合わなかつただけだと考えたほうがいい」

「こんなぱつちやり体型の女性を好きになる人なんていいるんでしょうか?」

「ああ、いるよ」

確信を持った様子で頷かれて、小さな希望の光が差したような気持ちになる。

しかし今日の私は、かなりマイナス思考だ。

「いるわけないです」

「俺は可愛いと思うが」

熱い眼差しで見つめられ、溶けてしまいそう。体が火照りだし、水を一気飲みする。「もう、冗談はやめてくださいよ。心臓に悪いじゃないですか。思い出してしまいそうです」

このまま話を続けると彼のペースに乗せられそうで、話題を途中で変えた。

「じゃあ、忘れさせてやろうか?」

破壊力のあるワードに、心臓がドクンと高鳴る。

「漫画みたいなセリフですね」

「どうか? 目の前に好みの女性がいたら逃したくないと思うのが、男の心理だ」

まるで私を狙っているみたいな口ぶり。珍しい展開に勘違いしそうになるけれど、私を恋愛や性的な対象として見る人には出会ったことがない。

「話を聞いてくれたので、元気になつてきました」

「それはよかったです」

「ちよっぴりドキドキする経験もできましたし。……もう恋しないで、お仕事一筋で頑張っていきたいです」

「なにを言っているんだ。こんなにいい女を放つておくなんて、風子さんの近くにいる

男は見る目がないだけだ。恋をしないなんて宣言するな。俺と恋愛すればいい」と幸せに暮らしていくそうだ。

「優しいんですね。ありがとうございます」

それで終わりにしたつもりなのに、彼はブランデーを呷^{あお}ると、会話を続けた。

「魅力的なのに、今まで誰かと付き合つたことはないのか?」「ありません」

「キスやセックスは?」

「セツ……!」

フレーズだけで恥ずかしくて、頬が火照^{ほて}ってしまう。

「あるわけないじゃないですか?」

「それはもつたいない」

たしかに、愛する人との行為はものすごくいいと聞いたことがある。

友達もそう話していたし、漫画や恋愛小説もそうだ。

女としての悦び^{よろこび}を知らないまま生きていくのは、損しているのかもしれない。

「相手がないとできません。なんなら、お兄さんが私の初めてを奪つてくれますか?」少し重くなってきた空気を変えたくて、私のキャラではないけど、わざと冗談めかし

て尋ねた。

「ああ、喜んで。たっぷりと、可愛がつてやる」けれど大真面目な顔でそう答えられたので、心臓を矢で射貫かれたみたいな衝撃が走る。

私とそういう関係になれると言つてくれるのは、稀な人かもしれない。

今後、誰とも付き合つチャンスはないだろうし……一生に一度くらい経験してみたいけど……

酔つ払つているせいか、イケないことを考えてしまう。

「本気ですか？」

「俺は嘘をつかない」

(初めて会つた人と……いいのかな……。悩むけど……委ねてみたいかも……やつぱり、ダメだよね。危ないよ。ダメダメ……でも……)

葛藤している自分に驚く。それだけ彼が魅力的なのだ。

「抱いてもいいくつて言つてくれただけで感無量です。じゃあ私は帰ります」

帰ろうと立ち上がつたが、足元がふらついて倒れそうになる。

「危ない！」

頭を打つてしまつと思わず目を閉じたが、痛みは襲つてこない。目を開けると、彼が

長い腕で私を受け止めてくれていた。

綺麗な顔があまりにも近くで、キスできてしまいそうな距離。

(こんな私を助けてくれた！めちゃくちや紳士だよお。感動しちゃう)

涙を流す私を見て、彼は驚いた表情を浮かべている。

「こんなに素敵な人に女性扱いされて、感動しています！ 本当にありがとうございます。救われました」

「一人で歩かせるのは危険だ」

そう言うと、彼は、私をお姫様抱っこした。

急に体が浮き上がり、夢を見ているのではないかと錯覚する。重いだろうに、軽々と持ち上げてしまう筋力に驚きを隠せない。

「お、下ろしてください」

「酔いが覚めるまで少し眠つたほうがいい。今日俺はこのホテルに部屋を予約してあるんだが、ツインルームに変更してもらえるか聞いてみる」

「えつ？」

なにを言つているのか理解ができない。

「急性アルコール中毒になつたら危ないから」

バーの会計を部屋付けにすると、男性は私をお姫様抱っこしたままでフロントに向

かつた。私をソファに座らせ、「連れの体調が悪くなつたから」と事情を話している。ツインルームが空いていたらしく、戻ってきた彼に体を支えてもらいながら歩いた。そのままエレベーターに乗り、部屋へ案内される。

背中を押されて入室すると、大きめのベッドが二つに、テーブルやソファベッドが置かれた立派な部屋だった。

「残念ながらスイートは空いていなかつたみたいだ」

「……でも、この部屋、とても高そうですね」

支払いができるか心配だったが、それよりももつと不安なのは、見知らぬ男性とベッドのある部屋で一緒にいることだ。

困惑しながらも窓に近づいて外を見ると、東京の夜景が一望できる。

「綺麗……！」

「そうだな。でも俺は……東京の夜景よりも風子のほうが魅力的に見える」
(いきなり呼び捨て？ でも、なんかいいかも)

「またご冗談を」

「さつきも言つたが、俺は嘘をつかないタイプだ」

自信満々に言われる。彼が近づいてきて私の頬を手のひらで包み込んだ。

「きみは自分を卑下する言葉ばかり言つてゐる」

「はい」

「風子は、綺麗だ。すごく……どうにかしてしまいたいくらい」

初めて会つたのに、その言葉には嘘がない気がして、心がだんだんと温まつていく。

「こんな私でよければ……どうにかしてもらえませんか？」

酔いに任せて、自分でも驚く言葉を発していた。

「名前くらい……名乗るのが礼儀だな」

そう言うので、私は首を横に振つた。

彼とはこの先、再び会うことはないだろう。

「そういうの、いらないです。私も大人ですからワンナイトラブを経験してみたい……。

もし私の体で役に立てるなら、好きな人を思い浮かべてもいいので……だ、抱いても

らえませんか？」

「煽りやがって……」

一瞬切なげな色が浮かんだ氣がしたが、彼はすぐに情熱的な目をして顔を近づけてくる。彼が顔を傾けると、唇に柔らかいものが重なつた。

(……私、キス……しちゃつてる……)

これがファーストキスだった。まさか出会つたばかりの男性とキスをするなんて予想外だ。

小さなリップ音を立てて口づけが繰り返される。酸素を吸い込もうと少しだけ開けた唇の間に、舌が入り込んできた。緊張で固まつた私の舌に、彼が自身のそれを絡ませてくる。

「ンっ、ンンっ……」

鼻から甘さを含んだ空気が漏れた。クチュリ、クチュリと卑猥な濡れた音が耳に届く。背中に添えられた彼の大きな手のひらから男の存在を感じて体温が上昇する。

全身がチヨコレートになつたかのようにとろとろになつていく。

(キスつてこんなに気持ちがいいんだ……)

頭の片隅でそんなことを考えていた。上唇を挟まれたり、下唇を吸われたり、歯茎を舐められたり。口づけにこんなにバリエーションがあるなんて知らなかつた。

彼が呑んでいたブランデーの味がして、キスをするだけで頭がクラクラする。

アルコールのせいなのか彼のせいなのかわからぬけど、酔いがさらに回つて、体がふわふわしてきた。

キスのその先の世界にも行つてみたい。唇が離れたので乞うように見上げると、うつとりした視線を向けてくれた。私の背中に手を回したまま、柔らかな微笑みを浮かべる。

「風子、綺麗だ」

「私なん、て……」

否定しようとすると唇を塞がれてしまう。わざとピチャピチャと音がするように舌を絡めてくるのだ。唇が離れ、再び上目遣いで彼を見つめる。

「これからは自分を否定するようなことを言つてはいけない。わかつたか？」

「は、はい」

これまでこんなに私を肯定してくれる人はいなかつたから、どんな反応をしたらいいのかわからない。

彼は私の髪に手を差し込んで愛おしそうに見つめてきた。
「いい子だ。風子は誰よりも美しい」

そう言つて、長い腕で抱きしめてくれる。

いつも私は大きな体だと言われてきたけれど、すっぽりと包み込まれてほわーんとした。初めて会つた相手なのに抱きしめられて心底安堵する。とても不思議だつた。

もう一度キスした唇が首筋に落ちてきた。チュッと啄むように吸つてくるので、くすぐつたくて身をよじつてしまふ。

「ひやあん」

「可愛い声を出すんだな？ もつと聞きたい」

魅惑的な動きをする指が胸の膨らみに下りてきて、形をたしかめるように曲線を這う。「柔らかい。風子の体はマシュマロみたいだ」

「……うふふ。面白い表現ですね」

そのまま指はウエストラインをなぞり、続いて腰回りに到達する。ゆらゆらと体が勝手に揺れる。次に彼の手が、ヒップラインに触れた。

「いい体だな……。素晴らしい……。汚れていないなんて奇跡だ」

「そんなこと……んっ」

否定しようとするときまた唇を塞がれてしまう。今度は言葉ではなく瞳で『卑下したらダメだ』と訴えかけられて、コクリと頷いた。微笑んで頭を撫でてくれる。

スカートの裾から手が入ってきて、ダイレクトに太腿に熱が伝わった。男性の手はゴツゴツしているイメージがあつたのに、こんなにも優しく触ることができのかと感動する。

「……ツ、くすぐつたい……」

官能的に触れられて、鳥肌が立つ。内腿に入り込んできたので、慌てて閉じて彼の手を挟んでしまった。そのせいでショーツ越しに彼の手の感触が伝わってくる。脚の間が熱くなつて、お腹の中がキュンと疼いた。

いちいち反応する私が面白いのか、彼は楽しそうに笑みを浮かべている。

「こういうことに慣れてなくて……めんなさい」

「気にしなくていい。俺が全部教えてやるから。今日を忘れられない日にする」

耳元で囁かれたセクシーな聲音に耳朶が熱くなつた。

体中を撫でられていくだけなのに、快樂に包まれてしまう。

両手を上げて万歳する格好になると、胸が強調される。私の胸はかなり大きくて、腕の長さに合わせて服を買うと胸がきつくてパンパンになるので、購入する際は苦労するのだ。だから今日もいつものように、伸びやすいタイプの綿のワンピースを着ている。彼の大きな手のひらにワンピース越しの胸を包み込まれた。私の反応をたしかめるよう真剣な眼差しを向けられる。目が合うと、現実を受け止めるのが恥ずかしくて、つい視線を落とした。

そうすると、揉まれている自分の胸が目に入つてくる。淫らだ。頬がだんだんと熱くなり、額に汗が滲んできた。

「男に揉まるれるのつてどう?」

「えつ? き、気持ちいいです……あつ。んっ」

両胸を同時に揉まれ、私は官能の世界へ没頭していく。

「大きい」

「嫌い、ですか?」

「大好きだ」

その言葉が嬉しくてにつこりと微笑むと、またキスをしてくれた。
熱いため息を吐いて、顔を胸元に近づけて埋めてくる。まるで甘えているような仕草に胸がキュンとする。

ワンピースを脱がされて、私はブラジャーとショーツだけの姿になってしまった。白衣に透けてしまわないようにと、ベージュのセット。色氣がないので恥ずかしくて逃げ出したくなる。

今まで恋人がいなかつたから、ほとんど機能重視の下着しか選んでこなかつた。今夜こんなことになるのなら、家にある中で一番可愛いピンク色のレースのセットを身につけていればよかつたと後悔が襲う。

それに、自分だけ興奮しているのではないかと心配にもなってきた。

他の人を想像して欲情してくださいとお願いしたけれど、そもそもこんなだらしないボディを見て発情できるのだろうか。

「ごめんなさい……。こんな地味な下着じや、ムードぶち壊しですよね」

「いや」

彼はおもむろに私の手を握ると、自分の股間へ導いた。

（硬くなつてる……！）

「好きな人のことを思い浮かべているんですか？」

「風子を見て欲情しているんだ。この責任を取つてもらわかな」

私の体を見て興奮してくれていると知り、感動で胸がいっぱいになる。見ず知らずなのに、すごくいい人だ。

「俺も脱ぐ」

そう言つて、彼がネクタイを外してワイシャツをワイルドに脱ぎ捨てた。引き締まつていて、腹筋が割れている。まるで彫刻のようななとてもスタイルのいい体躯だ。

一方の自分はブヨブヨで……羞恥心に襲われる。

彼は素早くスラックスを下ろす。

それを追うように視線を下げるとき、ボクサーパンツがもつこりと膨らんでいるのが目に入つた。

互いに下着姿になると、もう一度抱きしめてくれた。素肌が触れ合い、幸せな気持ちに包まれる。

「風子、綺麗な肌だな」

「ありがとうございます」

頬を持つて上を向かされ、情熱的な口づけを交わす。唾液が混ざり合い、銀色の糸が落ちた。キスをしながら移動して、ふと足がベッドにぶつかつた。

そつと寝かされ、体が沈む。彼に組み敷かれ、首筋にキスを落とされた。

「んつ……ああ……ンつ……」

糖分たっぷりな声が出てびっくりする。

彼は、口元に笑みを浮かべた。しかしすぐに真剣な目で私を見つめ、首筋をペロリと舐める。

肉厚な舌の感触が敏感な素肌を滑っていく。その唇がゆっくりと下がっていき、胸の谷間に到達した。

長い指がブライジャーの上から胸の弾力をたしかめる。触れられた場所から火がついたようす熱くなり、呼吸が乱れた。

気がつけば、彼はブライジャーのホックを外していた。まるで手品のようだ。これほどルックスなのだから、きっと女性の扱いには慣れているのだろう。

胸があらわになつて、慌てて手をクロスして隠す。

「もっと、ちゃんと見せてくれ」

「は、恥ずかしいです……」

「気持ちよくしてやるから」

手首を頭上に持つていかれる。片手で両手を拘束されて、動かそうとしても彼の力にはかなわない。空いている手で円を描くように胸を揉みしだかれた。

「もっと、ちゃんと見せてくれ」

「は、恥ずかしいです……」

「い、あ……んつ……ああ……」

彼の手の動きに合わせて、唇から官能的なメロディーがあふれる。まるで自分が楽器になつたみたいだ。

胸を執拗に揉まれるので、胸の先端がぷつくりと硬くなつてきた。

そこにも触れてほしいと自己主張するように勃起をしている。

素直な体とは裏腹に直接お願いはできず、私は脚をもじもじと動かすことしかできなかつた。

「風子、感度がいいな」

体が熱くなつてジンジンと痺れる。これが「感じている」という証拠なのかもしれない。自分だけどんどん気持ちよくなつてもいいのだろうか。

熱い視線を向けてくる彼の指先が、乳輪に触れるか触れないかのタッチで刺激を与えてくる。胸の先端にある蕾はさらに赤く膨れ上がり、若干の痛みすら覚えた。

しばらくそうしてから、ようやく、彼の手のひらが胸の先端を優しく撫でた。全身に走る甘美な刺激。まるで電流が流れているみたいだ。

「ああああ……」

「あああんっ」

二本の指でつまみながら、先端を人差し指でこする。そこが一層硬くなるのが自分でわかつた。

もう片方の蓄も同じように刺激され、頭の中が真っ白になつてくる。

乳頭を弄られるたびに体がクネクネと動いてしまう。

ふと、彼が身をかがめて胸の先に顔を近づけてきた。

(……なにするんだろう?)

彼が口を開け、赤い舌が伸びてくる。そして、チロチロと胸の先端を舐めた。

大好物を食べているような表情で、それを口に含む。そうして、もう片方の膨らみは丁寧に捏ねるのである。

「…………ん、ああ…………ん…………」

胸に彼の唾液がまぶされて艶めかしく光る。

「大きくて柔らかくて、本当に素晴らしい。ずっと触つてみたい……。気持ちよくて……離したくない……」

うつとりした声で言われて、素直に嬉しい。こんなふうに思つてくれる人がいるんだと、気持ちが向上してくる。

思い出してみれば、今までの人生、自分のことを否定ばかりしていた。基本はプラス

思考でいられるけれど、体型のことはどうしても悪く考えてしまうのだ。

明るいふりをして頑張っていたけど、その努力が報われた気がする。しかも、王子様のように素敵でイケメンな男性に抱かれるなんて、夢のようだ。

「あつ…………ん、あ…………ん…………」

切ない喘ぎ声が漏れる。

彼の右手が胸をクリクリと弄りながら、左手はだんだんと肌の上を滑り、腹部に触れた。その手が太腿をさすって、ショーツの上に到達する。

「そろそろ、こつちも触つてみていいか?」

中指でトントントンと叩かれると、ジンジンと快楽が響き、クチュッと濡れた音がした。

私はコクリと頷く。心臓の鼓動が速くなつてくる。

ショーツの隙間から指が入り込んで、割れ目をツーと撫でられた。

「あああんっ、あっ、あああ」

急に大きな喘ぎ声が出てしまった。

「痛かったか?」

心配そうに声をかけられて、首を横に振る。あまりにも強い快楽だったので、声が大きくなつてしまつたのかもしれない。

彼は花びらを開き、滲んだ蜜を指でくすぐり、隠れていた硬い真珠に塗りつけて、こ

れでもかというほど優しく触れる。

「んつ……あああつ」

身をよじると、ショーツを脱がされ、一糸まとわぬ姿になつた。彼が深いため息をつく。
「たまらない……」

膝の裏に手を入れて左右に大きく脚を開かれると、彼に丸見えだ。羞恥心に襲われて体を固くしたが、彼の指に淫芽を捏ねられるとすぐに弛緩した。そして次から次へと蜜があふれていることに気がつく。

（初めてなのにこんなに感じてるなんて……変態かと思われないかな……。でも、気持ちよくてこのまま委ねたい……）

彼を見つめると目の周りが赤くなつていて、興奮しているようだつた。彼は身をかがめて秘処に顔を近づけてきた。漫画で見たことがあるシーンだ。

「き、汚いからやめてください」

「そんなことない。いい匂いがする……。初めてなのにすごくいやらしい香りだ」

恥ずかしくて穴があれば隠れたいくらいだけど、彼は私のことを絶対に否定しない。

そういう確信があつた。

息を吹きかけられてそれだけで反応してしまい、体がビクンビクンと震える。

「可愛いな……ココも」

彼は楽しそうに笑つた後、隠れてコリコリになつている真珠をペロリと舐めた。そして餌玉のよう執拗に転がす。

頭の芯まで一気に走り抜ける快楽に腰が浮いてしまう。

「……あつ、ああ、ああんつ……！」

滴り落ちる蜜をジユルジユルと吸われて、意識が飛んでしまいそうになる。

体中の血管が大切なところに集中しているような感じがして、今にも弾け飛びそうだ。
（ひやあああ、ああああん、なんか……気持ちよすぎて……変になっちゃうつ……
あああつ、ああつ）

初めての私には少々強すぎる快感だ。シーツを握りしめて首を横に振る。

「外側で一回、イッておこうか」

舌の動きが加速し、ついに耐えられなくなつて、私の中でなにかが爆発した。

一瞬呼吸が止まり、目の前がチカチカする。信じられないほどの甘美な感覚。

（これが……イッちやうつことなんだ。すっごく気持ちいい……どうしよう……）

呼吸を乱している私に、彼が優しい瞳を向けてくる。

「風子、気持ちよかつた？」

「……は、はい」

「じゃあ、もっと奥のほうで気持ちよくなつてみようか？」

未知の世界を体験してみたい。

「お、お願いします……」

「了解」

彼が私の横で添い寝して背中に手を回す。抱きしめられているような格好だ。
彼の脚が私の片脚を挟んで、大きく開いた。背中にあつた手が腰を撫で下ろし、敏感になつてゐる花芯に刺激が与えられると、体温が再び上昇していく。

秘部全体を愛でるように撫でられた。

「あああん、あつ……」

潤いの泉の浅いところに指が入り込んできて、ゆっくりとかき混ぜる。

充分に柔らかくなつたそこに指が進んでいくが、未熟な隘路は狭くてなかなか奥にたどり着かない。

「狭いな」

「ごめんなさいっ」

「謝ることはない。俺のモノがしつかり入るように、時間をかけてほぐしていくから丁寧に扱われていることに感動を覚える。この時間が永遠に続けばいいのに。」

明日からは会うことがない人だと思うと切なくなつてくる。

体の中に入つてくる異物感を覚えながらも、徐々に慣れてきた。

少し入つては手前まで抜いて、また少し奥に進める。じれつたくなるほどの動きだった。気がつくと違和感がなくなつていて、スムーズに抜き挿しできる状態になつていた。その指のリズムに合わせて声が漏れる。

「あああっ、んっ、あっ、あつ……んっ……」

指を二本に増やして、狭隘が広げられていく。徐々に彼のモノを受け入れる準備が整つているのだ。

中指を深いところまで挿し込み、親指で真珠を捏ねられて、外側からも内側からも両方攻められた。わけがわからなくなるほど の快感に身震いしてしまう。

彼は体を少しづり下げ、指を動かしながら同時に胸の先端を舐めた。

体のありとあらゆるところを刺激され、余裕がなくなつていく。
耳に届くのは自分のいやらしい声と、淫靡な水の音。再び弾け飛びそうになつたとき、彼は動きを止めた。

どうしたのだろうと切なく見つめる。

「中でもイケそうだな……。指ではなく俺のモノでイカせたい」

小さくて薄いそれを初めて目にした。

素早く自らの滾り^{たなびき}に装着すると、私に覆い被さつた。

いつも避妊具を持ち歩いているのだろうか。これだけのビジュアルで、私のような人も優しく扱うのだから、女性に不自由はしないはずだ。ものすごい人数の経験があつても頷ける。

絶対に自分のものにはならないのに知らない相手に嫉妬心が湧き上がつてきて、私はそれをかき消すようにぎゅっと目を瞑つた。

眠り姫にするようにそつと口づけられる。目を開けるとこちらを射貫くような瞳とぶつかつた。

「これは、先ほど購入してきたものだ。今夜は絶対に風子を自分のものにしたいと」
そういうえば一緒に呑んでいたとき、「待つていて」と言つて彼は席を外した。
お手洗いに行つたのかなと思っていたが、少々長かった記憶がある。その時間に近くのコンビニかどこかで購入してきたのだろう。

「いつも持ち歩いているプレイボーイかと……」

「交際していた人はいるが……最近はすっかりご無沙汰だった。俺には忘れられない人がいて、そのせいでいつもうまくいかなかつたから、ここ数年は誰とも付き合わないことにしてたんだ。だから、もう三十三歳だが独り身だ」

「そうだつたんですね……」

「私を絶対にものにしようとしていたと言うからには、彼はぼっちやりが好みなのかもしれない。珍しい人もいるものだ。

「その忘れられない人のことを頭に思い浮かべてもいいですよ。切ない思い出があるんですね」

「ここまで大切に扱つてくれたことに感謝して、につこりと微笑んだ。
「……看護師をしていると言つていたが、どこの病院に勤めている？」

「えつ？」

このタイミングで脈絡もなくそんな質問をされるとは思わなかつた。

私が口ごもつている間にも、脚が大きく開かれて、彼の体が入り込んでくる。
背中に手が回つて顔が近づき、答えを促される。その間も大切なところに彼の熱の塊が当たつていて落ち着かない。

「……個人情報なので言えません」

「ここの中^{しつまゝ}で呑んでいたということは、近くの病院と推測するが」

どうして執拗にそこまで聞いてくるのか。
(もしかして私の体を気に入つて、セフレにでもしようとしているの?)
イケメンとこんな時間を過ごせるのは幸せだけど、セフレは勘弁してほしい。今はよ

くとも、結局傷つく未来が見えているから。

絶対答えないと、いうように口を引き結ぶと、彼は瞳に怒氣を滲ませた。太腿の裏側に手を添えられ、さらに開脚される。

その脚の間から見えた彼の腹筋。

そしてはちきれんばかりの男性の象徴。

あんなに大きなモノが自分の中に入るんだろうか……

彼は怒りを言葉にすることはなく、私の泥濘に滾りの先端を沈めてきた。指とは比べものにならないほどの圧迫感。

「深呼吸して……」

促されるまま、大きく息をついて呼吸を整えようとした。それでも緊張で強張つてしまふ。

彼は笠の部分だけを入れた状態で体を折り曲げて、愛情たっぷりのキスをしてくれた。本当に愛されているみたいな錯覚に陥り、涙がポロリと零れる。

（彼の名前を呼びたい。でも一夜限りの関係だから……深入りしてはいけないのに……）彼が涙をペロリと舐めた。

「甘い。嬉しいのか？ それとも……」

なにを言っているのかとキヨトンとてしまう。体内に彼の一部が入り込んでいるの

が落ち着かなくて、思考が追いつかない。

「涙にも種類があるんだ」

「そ、そ、うなんですね……ああっンッ」

急に圧が強くなつたので驚いて声が出てしまつた。

「悪い。風子が可愛くて……膨張してしまつたみたいだ。入れるだけで達してしまつかもしれない」

そう言つて、彼はゆっくりゆっくり奥へ進む。途中までは平気だつたけど、あるとき、隘路が引き裂かれるような痛みに襲われた。

「んっンンンンン」

自分からお願いしたというプライドが邪魔をして、素直に痛いと吐露することはできない。

眉間に皺を寄せてなんとか耐えていると、彼が親指を花芯に当て、左右に揺らす。すると甘い電流が腰の辺りまで流れ込んで、痛みが軽減された。

その瞬間、体の力がふんわりと抜けていく。

隙を窺くように、彼は自らの滾りを奥深くまで挿し込んだ。

「ああっ……！」 んっ、あああっ

「奥まで入った」

そのまま動かないでじつとしていてくれる。彼の体の一部分が自分の中に入っているのが、不思議でたまらない。

「……すごい、おつきい」

「そんな顔で、エロいこと言うな。反則だ」

(普通のことを言ったのに、なんで反則なの?・)

体を折り曲げ、また私のことを抱きしめる。

「どこの病院に勤めてるんだ?」

そして、また同じことを聞いてくる。

「まさかストーカーにでもなるつもりですか……あつ、んつ」

そう聞き返すと、私が言い終わるかどうかのタイミングで、彼がゆっくりと腰を動かし始めた。

ぎりぎりまで抜いて、奥まで滑らせる。何度も繰り返されると、私の中であふれている蜜が潤滑油となつて、滑りがよくなってきた。

緩慢な動き。そのたびに、パチュ、ピチュと淫らな音が聞こえてくる。

「馴染んできた」

「……は、はいっ……なんか、変わった……感覚……です。これがセックス……なんですねつ、あつ……んんつ」

「ああ、そうだ。俺と風子はセックスしてるんだ」

腰をぐるりと動かしてかき混ぜられる。

「はああっ……ひゃん、あつ……」

体の一部が彼の形に作り変えられていくようだ。それが嫌だとは思わない。

奥深いところを突かれると甘い声があふれる。

(こんなのが、忘れられるわけないよ)

自分の体が愛しいって思えるほど、大事に抱いてくれる。

「風子、よくなってきたか?」

「すっごい、です。奥が……溶けちやいそう……あつ、あつ、ンツ……」

熱の塊に私の蜜をまとわせ、強く腰を打ちつけてくる。

肌と肌がぶつかり合う音が響き、ベッドのスプリングがギシギシと鳴る。

彼の手が伸びてきて、勃起した胸の先端を捏ねられ、体の感度が高まっていく。

「アツ……ンツ……ああん、ンツ……」

抜き挿しするスピードがだんだんと速くなり、蜜壁が何度もこすられる。

彼は私の腰の横に手をついて、深いところをえぐる。

自分の体の中にこんなにも敏感な部分があつたなんて知らなかつた。

額に汗を滲ませてうつとりとした眼差しでピストン運動を繰り返す、名前の知らないイケメンがいる。

なぜかどこか懐かしさを覚え、必死でなにかを思い出そうとした。

「あああん、また……イッちやう……」

けれど、快樂でその思考はかき消され、淫らな嬌声を上げて、すべてをさらけ出していた。

「俺もだ」

私の体を味わい尽くそうとするように、熱杭をねじ込んでくる。そこで軽く達し、さらに激しく打ちつけられ、私は背を反らして絶頂を迎えた。

彼は私の腰をガツツリと押さえて、一心不乱に腰を振る。

自分の中にいる彼がさらに熱く硬く膨張し、二人同時に果てたのだった。

(知らない人と体を重ねちゃった……。気持ちよかつたなあ……)

そんなことを考えながら、体の力が抜けで動くことができない。

一度離れた彼が、再び私を力強く抱きしめる。

話しかけようとしても眠くてまぶたが開かない。そのまま私は深い眠りに落ちて

いつた。

目が覚めると背中に体温を感じた。

夢を見ているのだろうか。……いや、違う。

昨夜、私はワンナイトラブを経験してしまったのだ。

体にはまだ昨日の名残がある。

記憶は断片的だけれど、間違いないよう昨夜、超絶イケメンに抱かれたのだ。
(泥酔して大胆なことを言つちやつたんだ……わあ……恥ずかしそうる)

後ろの彼はまだ眠つてゐるみたい。

私の体を抱きしめる手をゆっくりと避けて、起こさないようにベッドから抜け出した。振り返つて見ると、見惚れてしまうような美形の男性だつた。

(こんな素敵な人に抱かれたんだ……。一生の思い出にしなぎや。私みたいなぱつちやりガールにはもうこういうチャンスはないだらうなあ)
マイナス思考に沈みかけたが、卑下するなど言われたことを思い出す。今までの人生

でこんなにも体型を気にするなど言つてくれた人はいない。
名前も知らない人だけど、惚れてしまいそう。

かな。

彼が目を覚まして、酔いも覚め、なんだこの女と思われる前に姿を消そう。

そう考えて、床に散らばっている下着や服を拾い集めて着替えていると――
「おはよう。今日は土曜日だけ出勤なのか?」ということは、病棟勤務の看護師?」

声をかけられてギョッとして振り返ると、彼がベッドに横になつたまま肘をついてこちらを見ていた。

「おはようございます……」

急いでワンピースを着て、おそるおそる彼に近づく。

「昨日のことを覚えていますか?」

「もちろん。全部覚えてる。太腿の内側にはくろがあることとか、乳首の色も……」

「わー! やめてください。忘れてください!」

私は慌てふためいているのに、彼は余裕たっぷりの表情を浮かべている。

「風子、俺と付き合おう。……いや、結婚してもいい」

「はい?」

(結婚なんて……本気なの?)

起き上がってボクサー・パンツ一枚の姿のまま、こちらに近づいてくる。太陽の光が当たると、なおさらいい男だというのが強調されるようだった。

「俺は本気で言っている。まずは、連絡先を……」

彼がスマホを探し始める。視線が逸れた隙にダッシュで逃げようと、自分の鞄を手に持つた。

走り出そうとして、力強く手首をつかまれる。鞄の中身を床にぶちまけてしまつた。慌てて拾っていると、彼もしゃがんで手伝ってくれる。

ところがすぐにその動きが止まつたので、どうしたのかと見ると、手には私の職員証があつた。

(身バレしてしまった!)

取り返そと手を伸ばすと、彼は驚くほどすんなりと返してくれた。

やっぱり知らない男性とは寝るべきじゃない。

もしこの人がうちの病院に入院してきたら、めちゃくちゃ気まずいじゃないか。

素晴らしい人に抱かれたことはとても幸せな出来事だったけど、これからは絶対にこんなことないと心に誓う。

その後は引き留められることもなく、逃げるようホテルの部屋を退出した。

あの素敵なお伊さんは、抱かれてから一週間が過ぎていた。忘れようとしても、熱い眼差しや優しく触れてくれたことが忘れられない。

本当に素敵な人だった。

今日は夜勤で、同期の園田真由香そのだまゆかと先輩の中山さんなかやまと一緒に勤務中だ。

ナースコールは鳴らず、緊急の患者さんも今のところ入ってこず、平和な夜である。パソコンでカルテを入力して、夜中に交換予定の点滴を確認し、一息ついた。

「ねー、聞いた？」

真由香が話しかけてくる。彼女は胸が大きくてウエストがキュッと締まっていてヒップラインがとても美しく、ナイスバディだ。サラサラのボブヘアに、大きな二重と色っぽい唇。

女の私から見ても惚れてしまうほど素敵な容姿をしている。そしてコミュニケーション能力が長けていて、病院内のスタッフとはほとんど仲よし。なので情報通なのだ。

「ん？」

「明日日から配属されるドクターのこと！」

三十三歳の若さにして、心臓の手術では右

立ち読みサンプル はここまで

に出る者はいないほど優秀なんだって。しかもアメリカから帰ってきたばっかりらしいの。めちゃくちやすごい人なんじゃないかって期待してて」

「そうなんだ……」

普段こういう話にはあまり興味を持たない中山さんが、眼鏡をクイッと上げてこちらを見ている。

「アメリカでもかなりの件数の手術をしてきたそうね。私たちも学ぶことが多いんじやないかしら」

さらに珍しく会話に参加してきた。

「そんなすごい先生が心臓外科医でよかつたよね。だって一緒に働けるんだもん」

真由香はまだ見ぬ相手を想像して瞳をキラキラと輝かせている。

「しかも独身なんだって」

「独身……なの？　へえ、そう」

いつも冷静な中山さんが真っ先に反応した。

優秀で独身で結婚適齢期。多少容姿が悪くとも、病院のスタッフから特別な視線を向

けられる存在になるに違いない。

「イケメンだつたらどうしよう」